

K-527

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第31集

# 寶領塚古墳

## 第1次調査報告書

平成3年3月

米沢市教育委員会

# 寶領塚古墳

## 第Ⅰ次調査報告書

平成3年3月

米沢市教育委員会

# 序 文

この報告書は、實領塚古墳の全体像を把握するため、平成元年4月に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

この古墳は、昭和61年に地元が主体となって実施した測量調査では、2段構築を有する前方後方墳であると考えられていましたが、今回の発掘調査により、全長80mの3段構築の前方後方墳であることがわかりました。これは、現在確認されている前方後方墳としては、東北最大規模の、県内でも最古の大型古墳であり、米沢盆地の古墳文化の発生、発展の経緯を知る上でも貴重なものといえます。

昭和53年に戸塚山の山頂から全長54mの前方後円墳が発見されて以来、本市にも大型の古墳が存在することが確認され、その後、八幡原比丘尼平遺跡からは古墳のルーツとなる方形周溝墓が、また戸塚山古墳群からは東日本では北限とみられる帆立貝式古墳が発見されています。

このようなことから、今後、近隣市町の古墳群との関連も含め、米沢盆地全体における古墳文化の成立・発展経緯についても調査研究を進めてまいりたいと考えております。

この調査にあたり、格別のご指導、ご協力を賜りました考古学関係各位をはじめ、地権者の皆様、並びに地元窪田地区實領塚古墳史跡保存会の皆様に対し心から御礼を申し上げます。

平成3年3月

米沢市教育委員会

教育長 小口豆

# 例 言

1. 本報告書は平成元年4月3日～同年4月28日に実施した、米沢市窪田町窪田字北賣領に所在する賣領塚古墳の発掘調査報告である。
2. 調査は米沢市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会  
調査総括 二宮幸雄  
調査担当 手塚 孝  
調査主任 金子正廣  
調査補助員 原 三郎  
作業員 小林理香、後藤英雄、佐々木一、須藤重男、藤守伊知郎、  
八卷慶一、八卷 隆、八卷 久、佐藤栄作、八卷八郎右エ門  
事務局 梅津幸保、小林伸一、山田 隆、山口恵美子  
調査指導 山形県教育庁文化課  
調査協力 遠藤栄吉、尾形宮重、後藤正則、高野創平  
鶴巻 哲、中村昭一、八卷 隆  
窪田地区賣領塚古墳保存会 (敬称略)

4. 掲図の縮尺は各図面にスケールで示した。
5. 本書の作成は手塚 孝が担当し、編集は手塚 孝、菊地政信、責任校正は小林伸一、山田 隆がその責務に当った。

## 本文目次

序文

例言

目次

1. 遺跡の概要	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の成果	3
1) トレンチ調査の概要	3
• A トレンチ	3
• B トレンチ	3
• C トレンチ	7
• D トレンチ	7
• E トレンチ	7
• F トレンチ	7
• G トレンチ	7
• H トレンチ	10
• I トレンチ	10
2) 墳丘	10
• 前方部	10
• 後方部	10
3) 周溝	11
4) 舟石	11
5) 實領塚古墳の復元	11
4. 検出された遺物	13
5. 實領塚古墳と米沢盆地の前・中期古墳の分布	13
1) 古墳の分布と河川	14
2) 古墳の立地と年代的分類	16
6. まとめ	17

## 挿 図 目 次

第1図	寶領塚古墳周辺の地形図	2
第2図	寶領塚古墳トレンチ配図	4
第3図	寶領塚古墳Aトレンチ・Hトレンチ平面図	5
第4図	寶領塚古墳Bトレンチ・Gトレンチ平面図	6
第5図	寶領塚古墳Cトレンチ平面図	8
第6図	寶領塚古墳Eトレンチ・Fトレンチ平面図	9
第7図	寶領塚古墳復元図	12
第8図	米沢盆地の古墳の分布図	15

## 図 版 目 次

第一図版	寶領塚古墳の発掘（一）
第二図版	寶領塚古墳の発掘（二）
第三図版	寶領塚古墳の発掘（三）
第四図版	寶領塚古墳の発掘（四）
第五図版	寶領塚古墳の発掘（五）
第六図版	寶領塚古墳の発掘（六）
付 図 1	寶領塚古墳測量図
付 図 2	寶領塚古墳全体図



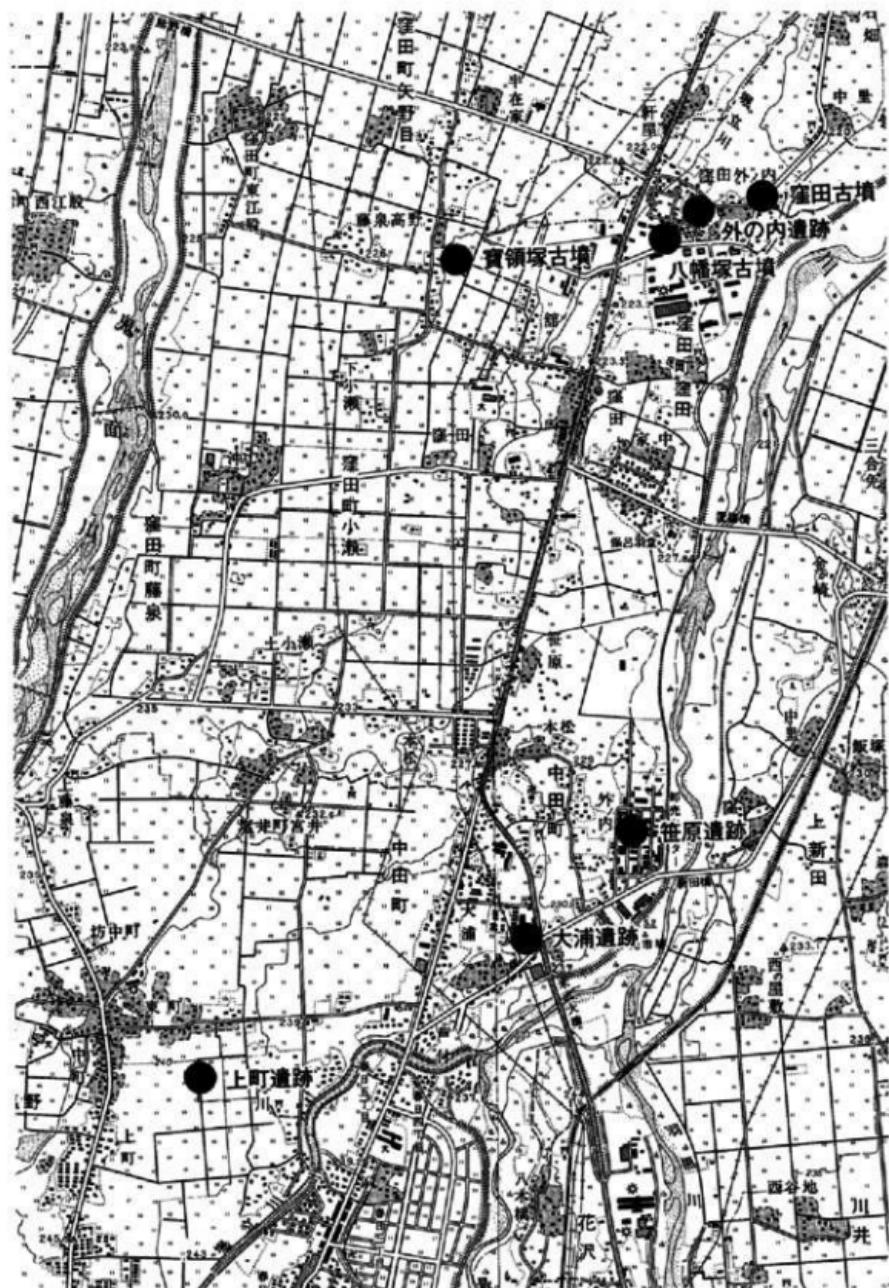
## 1 遺跡の概要

本古墳は米沢市窪田町窪田字北賣領863-1他に所在する。付近一帯は西の鬼面川によって形成された扇状地と東側の羽黒川、松川両河川の扇状地が複合した沖積性台地であり、後に鬼面川・松川が河岸段丘を発達させ、地図上では南北にのびる帶状地帯を形成している。古墳はその複合扇状地の末端部に位置し、水田地帯の中では古墳の存在する部分だけが、こんもりと小高くなっている。またこの周辺は鬼面川・松川（最上川）両河川の河岸段丘が古くから形成されたこともある、重要な遺跡が数多く認められる。縄文時代中期の「外ノ内遺跡」を最古に米沢市最大の縄文晩期の集落跡となる上町遺跡、奈良時代の置賜郡衙と推測される大浦B遺跡を中心とした大浦遺跡群、同じく関連施設となる笹原遺跡、そして賣領塚古墳に密接なつながりを有するものとして八幡塚古墳・窪田古墳が分布している。さらに最近では中田町、外ノ内を主体に窪田地区全域に亘って中世期の遺跡が発見されており、最近の米沢市内では最も注目されている地域でもある。

古墳が確認されたのは昭和61年5月であり、地元上窪町下部落が主体となって、米沢市教育委員会、まんぎり会等の指導のもとで測量調査を実施した結果、約60m以上を有する二段構築の前方後方墳であることが判明した。その後、賣領塚古墳を永久保存する目的で、賣領塚古墳史跡保存会が発足している。今回の調査も当保存会の要望である市指定を前提とした学術調査であり、古墳の規模や上部構造、周溝の有無、それに昭和50年頃に圃場整備によって失われた前方部を把握する目的で米沢市教育委員会が主体となって実施したものである。

## 2 調査の経過

昭和63年度の測量調査を基に、失われた前方部の確認と同溝の有無に主力を置き、トレンチ法を採用することにした。測量基点となるトラバースを用い、前方部を確認するAトレンチをT10とT22を結ぶ2m×56mを配し、後方部を中心として東に2m×18mのBトレンチ、北にT6とT7を延長した2m×12mのCトレンチ、西にはT16から2m×6mのDトレンチと東西南北の4本のトレンチを設定し、平成元年4月3日から調査を開始した。その結果、Bトレンチ内からは幅2mの周溝と葺石の一部が検出され、Cトレンチ内からは1段目と2段目にかけて葺石が密に認められた。そこで、葺石の状況を把握するため東に2m拡張し4mとした。さらにCトレンチとBトレンチの調査によって3段構築を有することが判り、くびれ部を確認するためにEトレンチ・Aトレンチ南面から前方部と推測される周溝の一部が認められたことから東側に1m×8mのIトレンチ、後方部との接続のためにFトレンチ・Hトレンチ、最後に後方部のコーナー部分にGトレンチを設けた。調査の進行状況と遺構の広がりからCトレンチと同様にFトレンチ・Eトレンチも変則的に拡張した。調査は葺石の検出等で拡張を行ったこともあり、前方部と後方部



第1図 寶領塚古墳周辺の地形図

の調査を平行して進めたが、概ね前方部の調査は4月3日～4月13日、後方部の調査を4月14日～4月21日に掘り下げを終了し、4月22日以降は写真撮影、セクション図作成、平面図作成を4月24日、4月25日からは埋め戻しを行い、4月28日で今回のⅠ次調査を終了した。

### 3 調査の成果

今回の調査はA～Iの9本のトレンチを配して行ったが、既に述べている様に前方部の大半は圃場整備事業によって失われている。測量調査の測量図では後方部北側の等高線の一部と賣領稻荷神社付近と神社に通ずる階段が乱れている他は後方部に関してはほぼ原形に近い形で残存しているものと推測していたが、DトレンチとEトレンチの調査によって、後方部の西側面も大きく削平していることが判った。一方、これまでの二段構築と思われていた古墳が、三段構築を有するなどの成果もあった。ここでは各トレンチの調査結果を簡単に述べ、最後に古墳全体の成果について記したい。

#### 1) トレンチ調査の概要

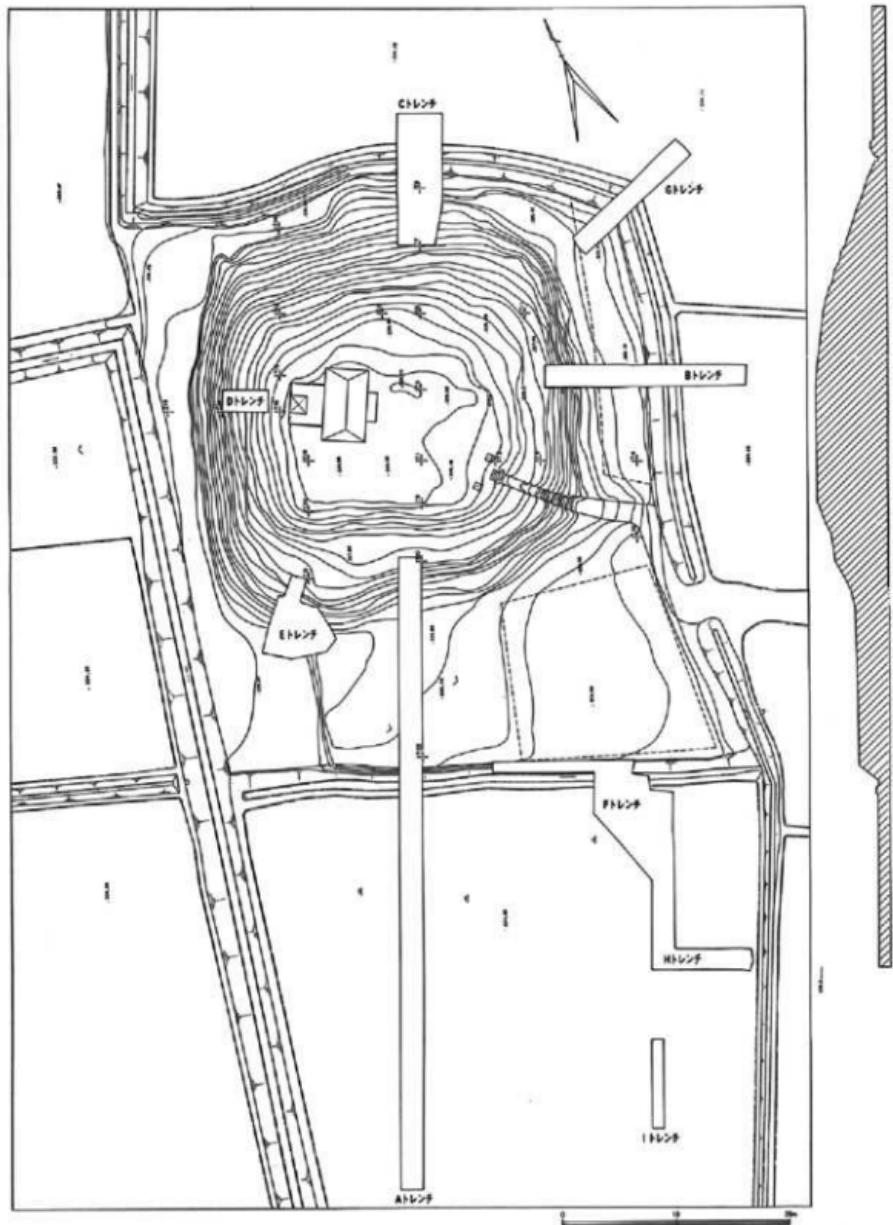
##### ○Aトレンチ [第3図]

T10の基点から南に18・3・15・10・10mの5ブロックに細別し、計56mのトレンチを設定した。便宜的に北から南にかけてA<sup>1</sup>～A<sup>5</sup>トレンチと仮称する。A<sup>1</sup>はT10の直下から傾斜面があつて後方部の2段目の上場と下場状に認められるが、葺石の痕跡が存在せず、下場のラインが斜状に移行する点からみれば、後方部の2段からのびる前方部を削り取った可能性がある。A<sup>2</sup>は失った前方部の状況をみるためにもので、断面でみると1層は黒色土を主体にした粘土層との版築層、2は黄褐色系のシルト層と粘土層の混合した版築層で、3は黒褐色の旧表土、4は黄褐色の粘土となる地山であり、旧表土の3層の上部から2層、1層と版築つまり盛土したことが判る。

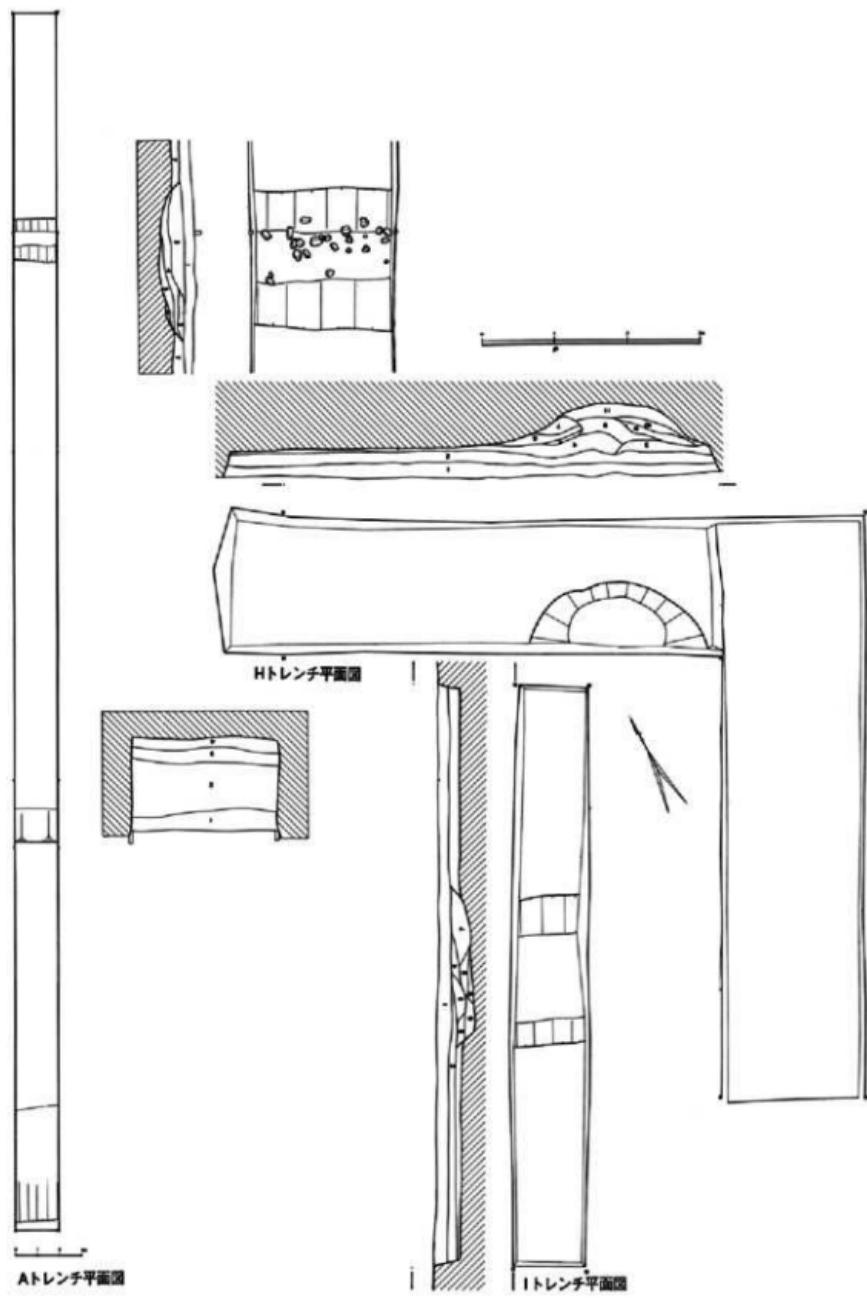
そしてA<sup>4</sup>とA<sup>5</sup>のトレンチの境から溝内に拳大の円礫を有する溝が発見された。埋土は黒色系の泥質土でF5とF6にシルト質を含んでいる。幅は確認面から185cm～195cm、深さ15cm～20cmを測る。この溝は前方部の直下に掘り込まれた古墳に伴う周溝と考えられ、溝内の礫はB・C・G・Fトレンチで検出された礫群と同じく、墳丘から落下した葺石の一部である。なお、前述のA<sup>2</sup>トレンチで確認された断面で旧表土を基準に想定すれば、約50cmの深さを示していたものと推測される。

##### ○Bトレンチ [第4図]

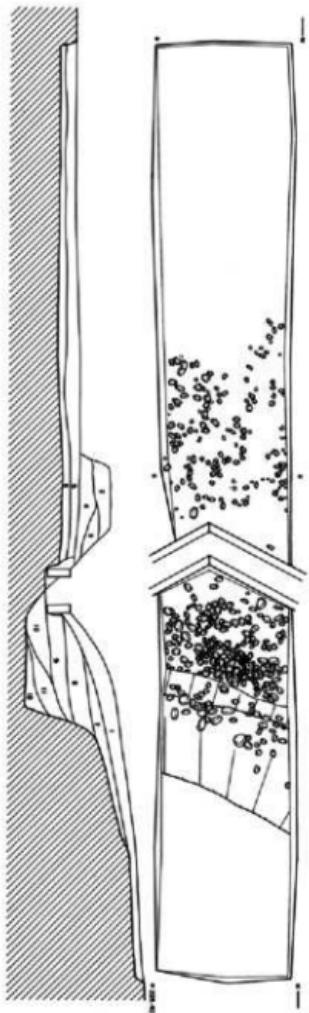
T5を中心にして東側に90°振った2段目から設定したものである。古墳の2段上場から下場、1段目と周溝が確認されている。葺石は2段目の上部が落下して欠落しているが、比較的残存している。1段目の平坦部は現在畑を耕作していることもあって、点々としか認められなかった。地元の話しでは少し掘ると石が出るので、意図的に掘って石を集めたと言う。おそらくは後のCト



第2図 寶鏡塚古墳トレンチ配置図



第3図 貝鏡塚古墳Aトレンチ・Hトレンチ・Iトレンチ平面図



Gトレンチ平面図



Bトレンチ平面図

第4図 寶鏡坂古墳Bトレンチ・Gトレンチ平面図

レンチの様に全面に呈していたものである。周溝は一部が排水路で破壊されているが、幅200cm～220cm、深さが20cmを測る。また溝の底面に沿って多量の礫が検出されているが、1段目の側面に葺石が認められることからすれば、側面の葺石が欠落して堆積したものと考えられる。

確認面からの状況を記せば、1段目の高さが160cm、平坦面の幅が500cm、平坦面から2段目の高さが200cmとなる。

#### ○Cトレント [第5図]

葺石が最も顕著に認められたトレントである。トレント内では1段目と平坦面に礫が集中し、2段目から側面に相当する斜面は葺石が欠落し、部分的に認められた。付近には大木の切り株が存在することから2段目が崩れているかも知れない。周溝は確認面から深さ45cm～50cm、幅が175cm～220cmをなす。墳丘内から落下した葺石は墳丘寄りの底面に集中している。確認面からの状況を記せば1段目の高さが170cm、平坦部の幅が250cm、平坦部から2段目の上部の高さが180cmである。

#### ○Dトレント

後方部の西側の状況を確認するために設定したものであるが、圃場整備によって削られていることが判明し、調査を断念した。

#### ○Eトレント [第6図]

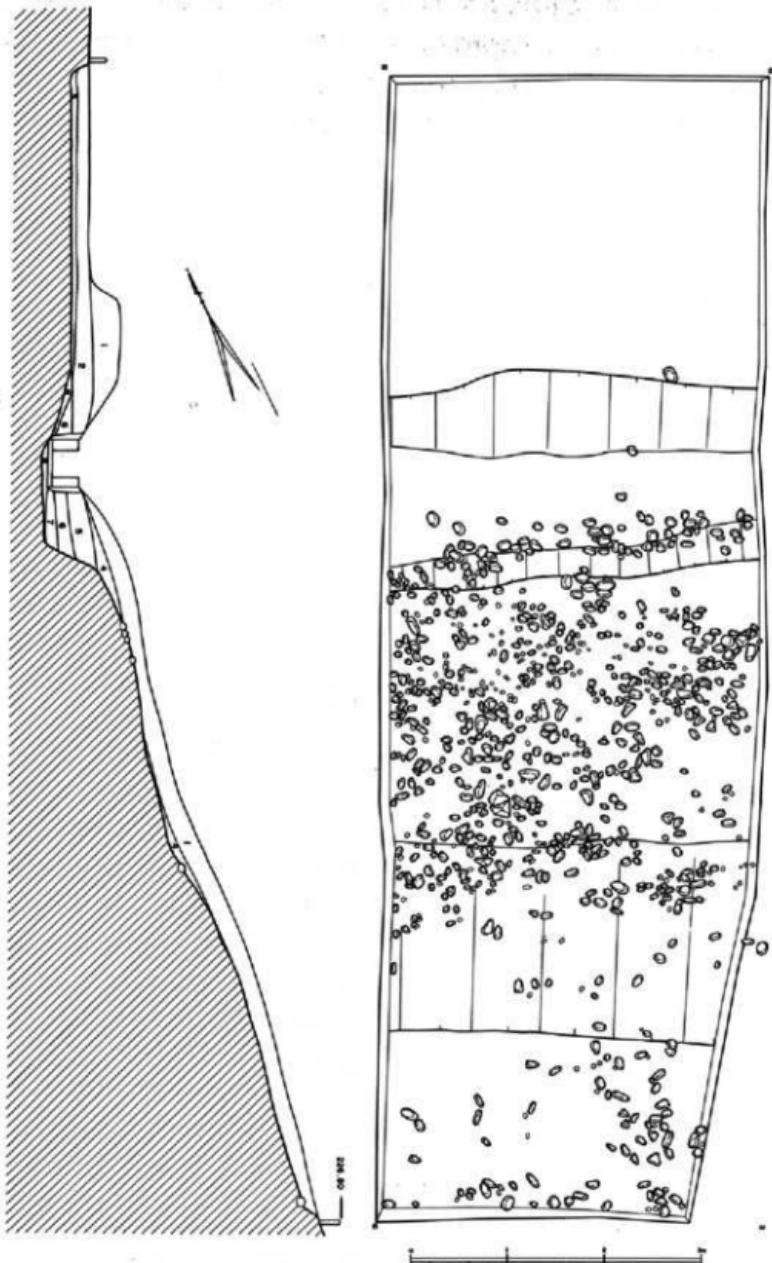
前方部と後方部とのくびれ部分を確認するために設定したもので、東側のくびれ部は果樹園が存在することで、やむなく西側に調査区を設けた。第6図に示した様に北側はDトレントと同様に重機による破壊を受けており、南端にも後世の擾乱を有する落ち込みがみられた。その中間に礫が多数残存し、葺石の一群と考えられる。

#### ○Fトレント [第6図]

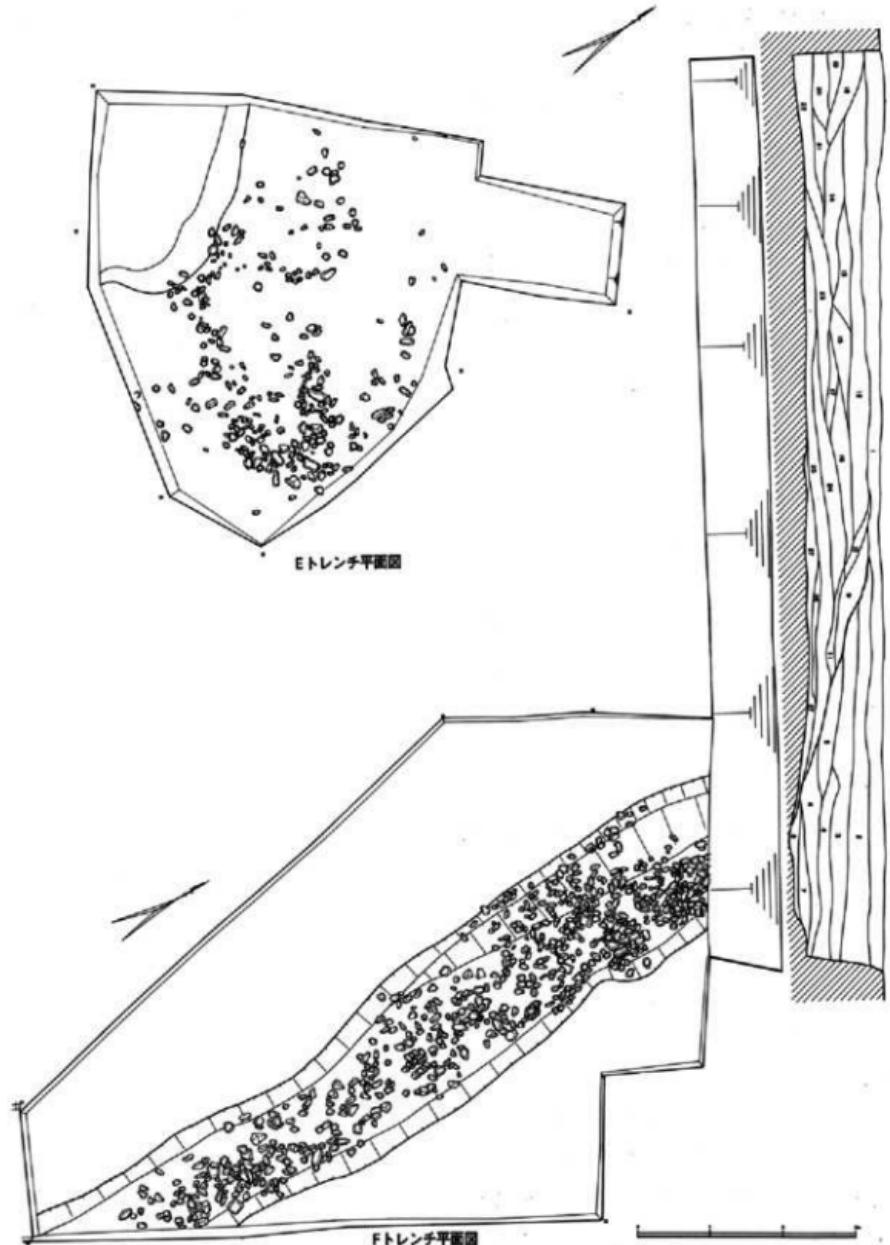
圃場整備によって前方部が切断された斜面を面整理した結果、断面に前方部の側面の落ち込みが認められたので、その箇所を中心に南北にFトレントを配し、さらに同溝の方向から西側に一部拡張した。同溝は斜に幅152cm～206cmを有し、11m程検出され、遺構確認面からの深さは15cm～25cmと圃場整備の削平で浅くなっている。溝の底面には前方部の側面墳丘から落下した多量の葺石が集石している。断面はF1～F27の層位に分類され、F1は現在の耕作土（表土）でF27が古墳築造以前の旧表土、F9～F26の18枚が古墳の版築層、F2～F8の7枚は前方部の版築盛土を後世になって削平した整地層と考えられる。

#### ○Gトレント [第4図]

後方部のコーナー部を知るために1段目の平坦面から北東部に2m×13mのトレントを設定した。平坦面は畠地になっており、葺石は検出されなかったが、同溝内部に多量の落下した葺石の残存が認められている。同溝は水田の排水路の設営で同溝外側の立ち上りが失われているが、セ



第5図 貴賀古墳Cトレンチ平面図



第6図 貝領塚古墳Eトレンチ・Fトレンチ平面図

クションから判断すれば幅230cm位と予想される。確認面からの深さは26cmで、同じく1段目の高さは現高で155cmとなる。

#### ○Hトレンチ [第3図]

Fトレンチ内で検出された同溝の方向からさらに追うために東に2m×6mを配した所、トレンチの西側に土壤状に認められた。このことは後方部から前方部にのびる周溝が全周せずに一部切れることを示すものである。

#### ○Iトレンチ [第3図]

Aトレンチで確認した前方部の端を確認するためにF・Hトレンチの南側方向に1m×10mのIトレンチを設定した。トレンチのほぼ中央から幅200m、深さ18cmの周溝が検出されている。

### 2) 墳丘

これまでのトレンチ調査で述べている様に、前方部の三分の二が圃場整備で失われ、後方部も西側から北西にかけて削平と水田用水路によって破壊されているので、全体的な墳丘の計測値は明確にできないが、現存する墳丘とトレンチ調査で明らかとなった成果を基に説明を加えたい。

#### ○前方部

Aトレンチ、Eトレンチ、Fトレンチ、Hトレンチ、Iトレンチの5本のトレンチを配して調査を実施した結果、周溝が確認され、「バチ」型に極端に広がる前方部を有することが判った。西側は調査を実施していないので明らかにできないが、現存する墳丘から推測すれば55m～57mの前方部幅を有するものと考えられる。前方部長はAトレンチの周溝によって40mと算定され、墳丘は、後方部の南面となる2段目のテラスが現存することからすれば、前方部は少なくとも2段目からのびていた可能性が高い。

#### ○後方部

現況では東側部と南側、北側の一部が保存状態が良好で、2段目と3段目が確認される。西側は墳丘の2段目から重機等によって全面が削平している。3段目は南西と北東部を対角線状に乱れており、西側から北側にかけ顯著であった。おそらくはこれまでの神社等による造改築によって土砂の移動や削平が行なわれたものと考えられる。墳丘の大きさは、B、C、Gの調査状況と西側の2段目的一部が残存していることから復元することは可能であり、調査の結果で3段構築を有することが判った。各段の推測径としては、1段目が主軸長となる後方部長が40m、後方部幅が47m、2段目が主軸となる南北幅が30m、東西幅が31m、3段目が南北幅で20m、東西幅が22mと1段目に関しては主軸よりも後方部幅が横位の特徴を示すのに対し、2段、3段は方形に近い形態である。従って、各段を区画する平坦面も東西南北の状況に異なりを呈している。簡単に数字を列挙すれば、1段目の平坦面の径が東西面が5m、南北面が2m、2段目が南北東西幅が等しく2m、各段の高さとしては、調査時点の確認面からの高さで1段目が160cm、2段目が200

cm、3段目の高さが180cmとなり、後方部の全体の高さは5.4mとなる。ただし、1段目は畠地となつておらず、先にも触れた様に耕作の際に葺石を除去したことから想定すれば削平している可能性もあり、現況での高さでは1段目160cm、2段目200cm、3段目180cmであるが当時としてはすべての段が180cmとの考え方も成立する。

### 3) 周溝

前方部のA、F、H、Iトレンチと後方部のB、C、D、Gトレンチから検出されている。古墳の墳丘に沿って全周するものとみられ、前方部の先端付近で、一部切れるのを特徴としている。周溝の大きさは、前方部が幅1.4m～2.1m、深さ15cm～25cm、後方部が1.7m～2.3m、深さが20cm～50cmとほぼ等しい。何れも周溝内部は底面から少し浮いた状況で多量の川原石が集石しており、墳丘上の葺石が落下して堆積したものと考えられる。遺物としてはFトレンチ内から土師器片1点が検出されたのみである。

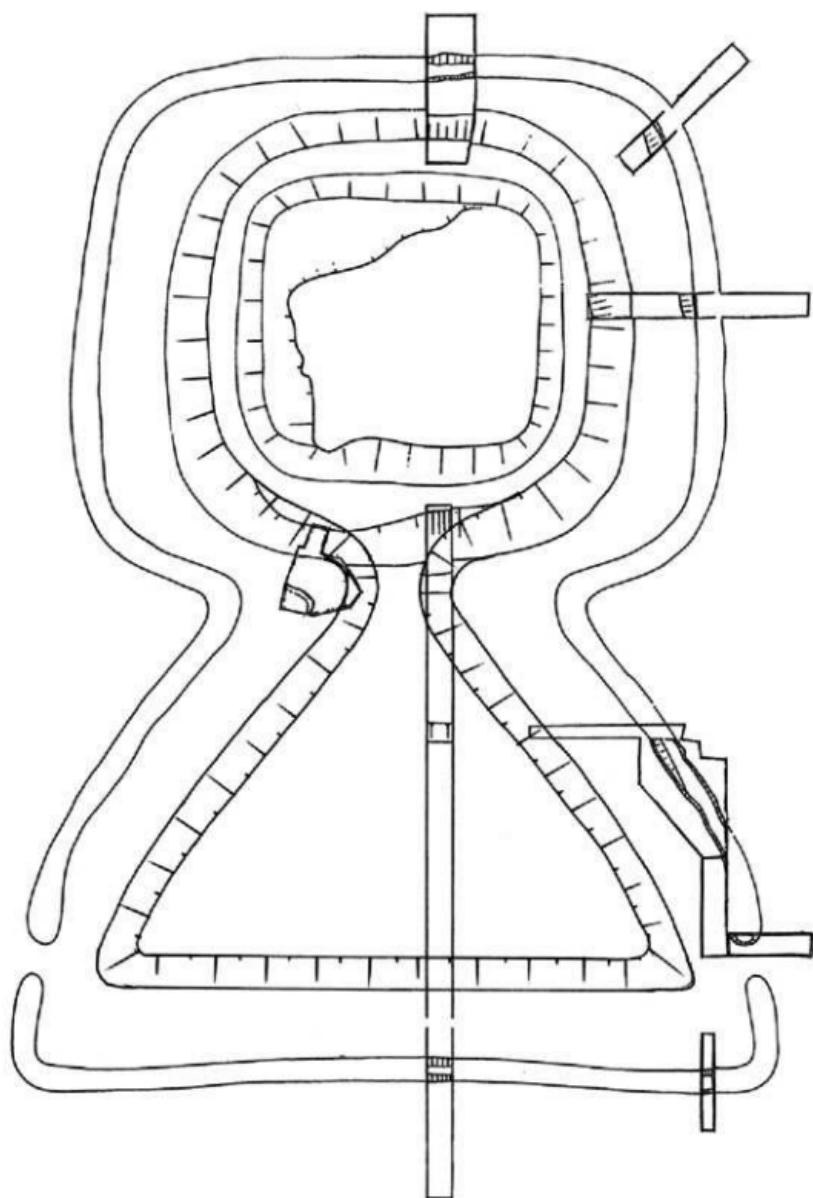
### 4) 補石

後方部に設定したB、C、E、Gの各トレンチ内で確認された。後方部の1段目、2段目の斜面及び平坦面に沿って検出されたもので、B、G、Eのトレンチの1段目は畠の開墾の際に抜き取られたものとみられ、1段目の平坦面には葺石は部分的しか認められなかった。ただし、Cトレンチの状況から想定すれば、墳丘全体に配されていたものと判断される。葺石は選定された拳大の川原石を使用しており、黒色系泥岩、安山岩、玄武岩等がみられることから主に鬼面川流域の石材を運搬したものと考えられる。県内で葺石の痕跡が認められた古墳としては、上ノ山市土矢倉古墳、米沢市八幡塚古墳の二例が存在するが、明確に検出されたのは寶領塚古墳が唯一である。

### 5) 寶領塚古墳の復元〔第7図〕

当初は2段構築の古墳と考えていた古墳が、3段構築を有し、全面に葺石をもつ前方後方墳であることが判った。トレンチ調査によって失われた前方部の一部も明らかとなつたが、予想以上に墳丘が破壊され、調査範囲外であったこともあって、西側に関しては前方部の端や後方部、それに前方部と後方部の接点であるくびれ部も未確認である。従って、未確認部分の調査を待たねば全体像の復元は困難である。しかし、AトレンチとCトレンチ内で周溝が認められたことによつて全長が80mであることが判つた。さらにFトレンチとH・Iトレンチの調査では前方部の開きが他に類をみない前方部の幅が後方部の幅を著しく超える形態であり、前方後方墳の研究を考える上でも注目すべき古墳であろう。未調査部分を残しての段階で計測値を述べることは軽率ではあるが、将来の課題としてあえて付け加えれば次の様にならう。

問題もあるが、寶領塚古墳の復元図も付け加えておいた。



第7図 宝鏡塚古墳復元図

## 寶領塚古墳計測表

全長 80m	比率 6 : 6 (後方部を6として)	
前方部長 40m		
前方部幅 57m		
後方部長 40m (1段目)	後方部 2段長 30m	後方部 3段長 20m
後方部幅 47m (1段目)	後方部 2段幅 31m	後方部 3段幅 22m
後方部高 5.4m (3段目)	後方部 2段高 3.6m	後方部 1段高 1.6m

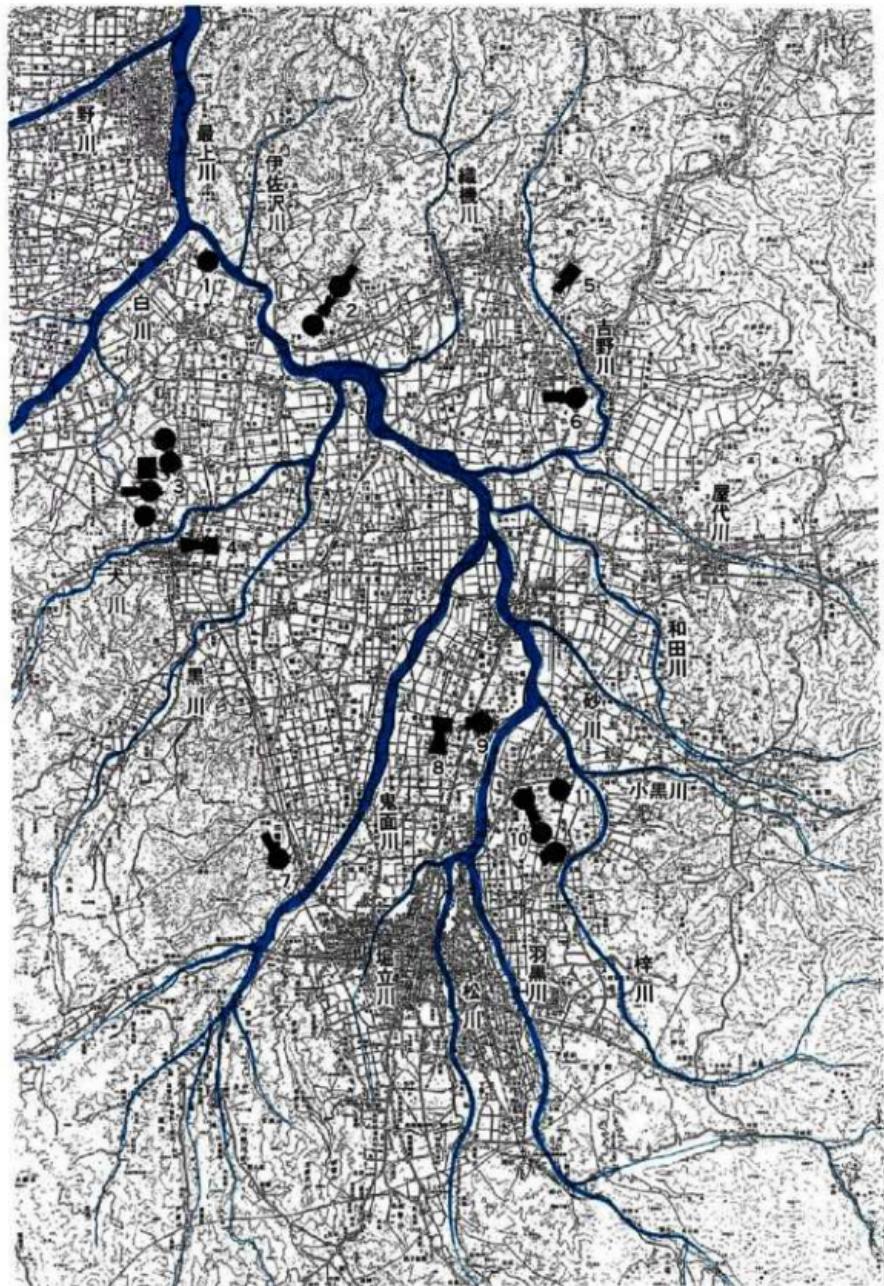
## 4 検出された遺物

9トレンチを配して調査を行ったが、遺物が検出されたのはFトレンチ内の周溝内から出土した土師器片1点のみである。小破片で表面にハケメ調整を有する変形土器の胴部片であり、年代を決定するまでには至らない。

## 5 寶領塚古墳と米沢盆地の前・中期古墳の分布

米沢盆地内に大型古墳が確認されたのは昭和52年の南陽市稻荷森古墳が最初である。稻荷森古墳は全長96mの三段構築を有する前方後円墳で、県内最大の規模をなす。この古墳の発見は県内はもとより、東北の古墳文化の発展を研究する上でも画期的なもので、従来の山形盆地を中心とした古墳文化の発達の優位性を根本から見直す結果となった。稻荷森古墳の発見を契機として当米沢盆地の古墳の存在を別の角度で再検討する機運となり、考古学グループ「まんぎり会」や地方自治体も積極的に調査を実施する方向となった。そして、昭和53年にはまんぎり会によって、戸塚山古墳群の発見、同じく昭和54年に県内初の前方後方墳の川西町天神森古墳、昭和55年には川西町教育委員会によって前方後円墳15基を含む方墳、円墳ら約200基が集結する下小松古墳(塚)、同じく南陽市教育委員会とまんぎり会によって南陽市宮内地内で、竜樹山(塚)古墳群、稻荷山(塚)古墳群、経塚山(塚)古墳群が新たに発見された。南陽市の3古墳群は川西町の下小松古墳と同じ様に当初は中世の塚と推測されていたが、前方後円墳や前方後方墳、円墳、方墳らも存在することも判っている。ただし、すべて古墳とか塚と言う方向には無理がある様に思われる。

昭和60年度に入ると米沢市教育委員会とまんぎり会の手によって、米沢市窪田町より八幡塚古墳、同じく東北最大の前方後方墳となった寶領塚古墳の発見があった。そして、平成元年には西置賜地区では初の長井市河井山から円墳4基を有する河井山古墳群、平成2年には既に周知の遺跡である蒲生田古墳群が前方後方墳3基が存在することを南陽市教育委員会の調査によって明らかにされた。さらに最近では米沢市広幡町の山頂に全長60m以上を有する前方後円墳が確認されている。この中で南陽市の稻森古墳、蒲田古墳群(3基)、川西町の天神森古墳、下小松山墳丘



1. 河井山古墳群 2. 綾堤山・電樹山・稻荷山古墳群 3. 下小松塚丘群 4. 天神森古墳  
5. 蒲生田古墳群 6. 稲荷森古墳 7. 成島古墳群 8. 實領塚古墳 9. 八幡塚古墳 10. 戸塚山山頂古墳群  
11. 戸塚山山崎古墳群

第8図 米沢盆地の古墳の分布図

最後のグループは、伊佐沢川と織機川を境とする南陽市梨郷地区の背後に接する丘陵地帯に分布する竜樹山古墳（塚）他2支群の古墳（塚）群であり、5～6世紀前後の古墳群と考えられている。第7グループとした。

この様に河川を1つの境界として、前・中期の古墳を分類すれば7地域のグループに分類することが可能であった。しかも米沢盆地を横断する最上川を中心として分布する古墳の存在に支流となる河川の発達が影響していることがうかがわれる。第8図に示した分布図をみると南では松川と羽黒川が合流する以南には認められず、北は白川と最上川が合流する河井山古墳までが北限となり、羽黒・松川両河川の合流地点から白川の合流地点までの範囲が古墳分布の領域と言っても過言ではない。また最上川河川の東側となる高畠地区には南より、小黒川、砂川、和田川、屋代川の4河川が合流しているが、西側の寶領塚古墳、下小松墳丘群等の様な古墳は存在しない特徴がみられる。このことは前にも触れた様に、高畠地内の4河川は他の河川と比較すれば、河岸段丘の発達が未成熟であり、顯著な氾濫状態を呈することが、古墳の成立を困難にしたとも考えられる。

## 2) 古墳の立地と年代的分類

次に古墳の分布する地形と古墳、もしくは古墳群の成立年代、それに支配区域の区画からも幾つかに細分することも可能である。問題もあるが、一応分類すれば次の様になる。

Aタイプ—河川から離れた山陵や尾根に分布するもので、古墳の築造年代が継続するもの。川西町下小松墳丘群、南陽市経塚山、竜樹山、稻荷山の各古墳群、米沢市成島古墳群、戸塚山山頂古墳群の4古墳群が存在する。

Bタイプ—山陵や尾根に分布するもので、一時的もしくは継続幅が少ないもの。長井市河井山古墳群、南陽市蒲生田古墳群、米沢市戸塚山山崎古墳群の3古墳がある。

Cタイプ—河川の合流地帯の平地に単独で存在するもので、川西町天神森古墳、南陽市稻荷森古墳、そして米沢市の寶領塚古墳の3基がある。

Dタイプ—河川の合流地帯の平地に群集墳を構成するもので、米沢市の八幡塚古墳、窟田古墳らの一群がある。

これらの4タイプのうち、Cタイプとした3基の大型古墳は、何れも主長墓的存在と考えられ4世紀代に位置する。そして、後続する主長墓としてはAタイプに属する戸塚山山頂古墳群の139号墳や、成島古墳の前方後円墳が上げられ、5世紀代を代表し、規模的には縮少するものの4世紀～5世紀代に位置する下小松墳丘群、蒲生田古墳群、経塚山他古墳、さらに河井山古墳群と戸塚山山崎古墳らが後続する可能性がある。

また筆者の個人的な考え方であるが、これらの古墳群を立地と河川から3区域に大別し、3主長墓の系譜として捕えることも可能である。

第1は米沢市周辺での系譜であり、東の梓川から西の黒川までの範囲で成立した文化圏で、寶領塚古墳から成島古墳→戸塚山古墳、もしくは成島古墳→寶領塚古墳→八幡塚古墳→戸塚山古墳の発展があげられる。

第2は川西町周辺での系譜であり、南の黒川から北の白川までの範囲で成立した文化圏で、天神森古墳→下小松墳丘群→河井山古墳もしくは下小松墳丘群の一部から天神森古墳→下小松小墳丘群の各支群→途中で分かれて河井古墳群の発展。

第3は南陽市周辺での系譜で、東の屋代川から西の伊佐沢川までの範囲で成立した文化圏で、稻荷森古墳→蒲生田古墳群→経塚山他の古墳群の発展である。

ただし、戸塚山古墳群や成島古墳群、南陽市の経塚山他の2古墳群の調査次第では発展過程の推移が別の形で移行する可能性もありうるし、福島県会津盆地の様に会津大塚山古墳の成立前に坂下町杵ヶ森古墳の様な小形の前方後円墳が既に存在していたことが判明しており、かならずしも大型古墳から→小型の古墳の発展とは限らない。この点も充分考慮し、米沢盆地の古墳文化の発生と成立について研究する課題も残されている。勿論、前方後墳と前方後円墳との関係や稻荷森古墳、天神森古墳、寶領塚古墳等の大型古墳とのつながり、文化圏（仮称）との優位性、東北地方を含めた大和朝廷（文化）の影響と服属、同盟関係の問題もあり、寶領塚古墳をめぐる米沢盆地の古墳の研究は今はじまつばかりである。

## 6 まとめ

今回の1次調査はトレンチ調査を主体としたもので、果樹園や水路の関係もあって、充分な調査を実施するに至らなかった部分もある。一方では前方部と後方部の調査の中で周溝や葺石の存在と従来の2段構築と推測された寶領塚古墳が、3段構築を有するなど特筆すべき成果も認められた。古墳の全長も周溝からの算定では80mとなる。

これまでに東北地方からは21基の前方後方墳が発見されており、福島県原町市桜井古墳（全長75m）、山形県川西町上小松の天神森古墳（全長75.58m）の両者が現在までの最大規模の古墳であった。今回の調査によって、寶領塚古墳が5m程上回る東北最大規模となる。また、葺石の存在や古墳の前方部幅が後方部幅よりも長く、他に類をみない形態であることも判った。後方部長を6とした比率では前方・後方部長の比が6:6と同一であり、川西町の天神森古墳（6:4.5型）よりも先行するものと言える。同じく最近の調査で確認された南陽市蒲生田古墳の2基の前方後方墳も仮に比率で表わせば34号墳が6:4、5号墳が6:5となり、比率を前程にした形態論で分類すれば、6:6型の寶領塚古墳→6:5型の蒲生田5号墳→6:4.5型の天神森古墳→6:4の蒲生田3.4号墳となる。ただし、比率を基準とした形態論だけで年代を求めるることは無理があることも事実であり、その点も考慮しなければならないが、現在確認されている山形県内の古墳

の中では最古の大型古墳であることは言えそうである。

次に米沢盆地における古墳文化の成立と発展の問題がある。稲荷森古墳、天神森古墳、寶領塚古墳、それに蒲生田古墳等の発掘調査によって、米沢盆地内の古墳成立（発生）は4世紀代であることは明らかとなった。しかも古墳の分布状況と立地から推測すれば、河川による文化圏が想定され、米沢地区周辺、川西町周辺、南陽市周辺の3区域に限定することも可能である。だが、古墳の形態から分析すれば、同時成立是不可能であり、4世紀中葉の方形周溝墓が検出された比丘尼平遺跡の存在からみれば、米沢周辺→川西周辺→南陽市周辺の順で成立し、4世紀末以降には三大文化圏として発展していったものと考えられる。その後、5世紀代に入ると米沢・川西周辺が急速に拡大し、6世紀以降は川西周辺が衰退し、米沢周辺と南陽市周辺に古墳文化の中心が成立するものとみられ、終末期に入ると戸塚山古墳群を中心とする米沢周辺を主に、南陽市周辺も宮内地区から赤湯・高畠地区周辺に移行して行ったものと考えられる。川西町に終末期古墳が存在しないこともうなづく。最後に寶領塚古墳は全て確認を得たものではなく、西側の状況やくびれ部の形態など数多くの課題を有している。米沢盆地の各古墳群の問題も含め、今後の調査研究に期待し、現段階のまとめとする。

東北地方の前方後方墳一覧表

No	古墳名	所在地	全長	後方部長	後方部幅	前方部長	前方部幅
1	寶領塚	米沢市窟田町字北寶領	80	40	(44)	40	(50)
2	桙井	原町市大字上浜佐	75	40	47	35	27
3	天神森	川西町上小松	75.58(72)	43.08(44)	51.05(48)	32.5(28)	32
4	宮山	名取市飯野坂	70	35			25
5	薬師堂	名取市飯野坂	68	35			21
6	観音塚	名取市飯野坂	63	30			23
7	京鉢塚	速田郡小牛田町素山	61~65	33~34			20~24
8	山居	名取市飯野坂	60	30			30
9	石ノ梅	玉造郡鳴子町大口	60?	30?			
10	鎮守森	河沼郡会津坂下町大字青津	55.2	27.2	30.1	28	15.6
11	高館山	名取市高館	53~56	27			15~16
12	鴻ノ巣3号	名取市箕輪	45?				
13	山居北	名取市飯野坂	42	20			12
14	長井戸	亘理町長瀬字長井戸	40				
15	本星敷1号	双葉郡浪江町大字北櫻世橋	36.5	22.5	17.6	14	(13.4)
16	出崎山2号	河沼郡会津坂下町大字上	33	21.5	17	11.5	10.3
17	経塚山6号	南陽市富内	30	20			
18	蒲生田3・4号	南陽市上野	29	18	18	12	11
19	蒲生田5号	南陽市上野	29	16	(16)	13	11
20	出崎山1号	河沼郡会津坂下町大字上	25	17	15	8	8.5
21	十九塚3号	耶麻郡塩川大字金櫛	23.8	12	14.7		9

( ) は推定長を示す

〈参考文献〉

1. 西村真次 1937 「置賜盆地の古代文化」 『山形県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9輯 山形県
2. 西村真次 1938 「置賜地方の古代文化—特に赤温古墳に就いて—」 『東置賜群史』上巻
3. 柏倉亮吉 1953 「山形県の古墳」 『山形県文化財調査報告書』第4輯 山形県教育委員会
4. 東海林繁子 1962 「赤湯町大字長岡狐山遺跡調査小報」 『[山形大学教育学部歴史学部歴史学研究会]歴研月報』特集号3
5. 川崎利夫 1964 「辺境における古墳文化の特質—出羽国を中心として—」 『日本考古学の諸問題』
6. 加藤 稔 1973 「最上川流域における古墳文化の展開」 『工藤定雄教授還暦記念論文集』
7. 佐藤鎮雄・尾形与典 1974 「清水前古墳群発掘調査概報」 『山形県埋蔵文化財調査報告書』山形県教育委員会
8. 東海林次男 1976 「出羽南半の古墳文化」 『山形考古』II-4
9. 亀田晃明・横戸昭二 1976 「米沢市戸塚山古墳群分布調査報告」 『置賜考古』第4号 置賜考古学会
10. 川崎利夫 1977 「米沢盆地における古墳の変遷に関する試論」 『山形考古』第3巻・第1号 山形考古学会
11. 川崎利夫 1977 「出羽地域における古墳の成立」 『考古学研究24巻第2号』考古研究会
12. 佐藤鎮雄 1977 「南陽市稻荷森古墳の調査」 『山形考古学第10回研究発表要旨』
13. 柏倉亮吉 1977 「山形県の古墳」 『山形考古』III-I (山形考古学会第10回研究大会講演要旨)
14. 加藤 稔 1978 「変容」を余儀なくされた古墳群—東北南半の前・中古墳についての試論 『山形史学研究』第13・14合併号 山形史学研究会
15. 加藤 稔 1979 「前方後円墳の幾何学—南陽市稻荷森古墳の墳形分析」 『山形県立山形工業高等学校研究集録』8
16. 加藤 稔 1980 「最上川流域での大型古墳出現の意義」(上) 『羽陽文化』109
17. 加藤 稔 1981 「最上川流域での大型古墳出現の意義(補説)」 『羽陽文化』

18. 加藤 稔 1982 「最上川流域の前方後円(方)墳」 『最上川』
19. 佐藤鎮雄 1982 「置賜地方の古墳・南陽市周辺の古墳を中心として」 『まんぎり創刊号』 まんぎり会
20. 川崎利夫 1982 「置賜地方の古墳、方形周溝墓と大型古墳を中心として」 『まんぎり創刊号』 まんぎり会
21. 加藤 稔・手塚 孝・亀田晃明 1983 「戸塚山第137号墳」 『米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第9号』
22. 手塚 孝・亀田晃明・菊地政信 1984 「戸塚山古墳群詳細分布調査報告書」 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第10集』
23. 手塚 孝・菊地政信 1985 「上浅川遺跡第1・2次調査報告書」 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集』
24. 手塚 孝・菊地政信・村山正市・橋爪 健 1986 「上浅川遺跡第3次発掘同上」 『米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集』
25. 吉野一郎・茨木光裕 1988 「稻荷森古墳発掘調査調査報告書」 『南陽市埋蔵文化財調査報告書第3集』
26. 藤田宥宣 1988 「下小松墳丘群群薬師沢支群第143・145号墳調査報告書」 『川西町埋蔵文化財調査報告書第12集』
27. 手塚 孝・菊地政信・金子正廣 1988 「遺跡詳細分布調査報告書第2集」 (八幡塚古墳の調査) 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第25集』
28. 手塚 孝 1988 「比丘尼平発掘調査報告書」 『米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集』
29. 吉野一郎・茨木光裕 1989 「稻荷森古墳発掘調査報告書」 『南陽市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集』
30. 藤田宥宣 1989 「下小松古墳群小森小支群第65号前方後円墳調査報告書」 『川西町埋蔵文化財調査報告書第13集』
31. 手塚 孝・菊地政信・金子正廣 1990 「遺跡詳細分布調査報告書第3集」 (寶領塚古墳の調査) 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第27集』

写 真 図 版



▲Aトレンチ全景



▲Aトレンチの周溝完掘状況



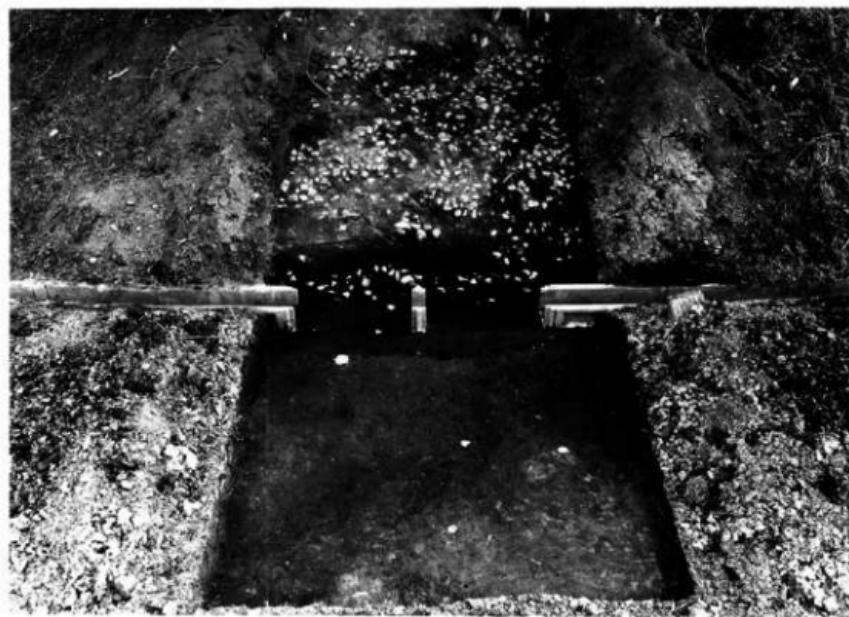
▲後方部全景（北東から北西を望む）



▲後方部全景（南東から北西を望む）



▲Bトレンチ発掘状況



▲Cトレンチ発掘状況



▲Fトレンチ完掘状況



▲前方部切断面のセクション状況



▲ Gトレンチ完掘状況



Ⅰトレンチ完掘状況



▲ Dトレンチ周溝内の葺石落下状況



▲ Dトレンチ周溝外の葺石状況

米沢市埋蔵文化財調査報告書第31集

寶領塚古墳

第Ⅰ次調査報告書

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月30日 発行

発行 米沢市教育委員会  
米沢市金池五丁目2-25  
TEL(0238)22-5111(内線727・728)

印刷 羽陽印刷  
米沢市中央三丁目9-22  
TEL(0238)23-0467